

## 第 71 回 大阪府青少年読書感想文コンクール

高校の部 特選

茨木高校 2 年 江里口遙香（えりぐち・はるか）さん

◇「当たり前」って本当に当たり前？

朝、包丁がまな板にあたる音で目が覚める。母の背中に「おはよう」と声をかけると「おはよう」と返事が返ってくる。普通の生活の中で聞こえてくる音、言葉による会話。誰もが経験する当たり前の日常だ。では、もし音が聴こえなかったらこの「当たり前」はどうなるのだろう。この本は、そんな問いを私に突きつけてきた。

この本の著者である五十嵐さんは、「コーダ」である。コーダとは、耳の聴こえない親を持つ、耳の聴こえる子どものことだ。彼らは幼い頃から、親の代わりに社会とのやり取りを担うことが多い。五十嵐さんも例外ではなく、幼少期から役所や病院、学校など様々な場面で通訳をしてきたという。また、親とコミュニケーションをとりたいとき、気づいてもらうために丸めたティッシュを投げたり、電気を点滅させたりするなど、音のない家庭ならではの工夫もあったという。「聴こえる世界と聴こえない世界との狭間で、どちらの世界にも属せない」そんな、コーダならではの葛藤もあったそうだ。私はこれを読んだ当初、「なんて大変なんだろう」「小さい頃から親のために頑張っていてすごい」と思っていた。しかし、五十嵐さんにとってその行為は特別ではなく、むしろ「当たり前」で、負担や苦痛を感じるものではなかった。

五十嵐さんを苦しめたのは、周囲の何気ない労いの言葉だった。善意によって発せられたその言葉は、「頑張っていて偉い」「親を支えるなんて大変そう」といった、まさに私が感じていた思いと同じものだった。言った本人に悪気はなかったのだと思う。しかし、そうした言葉は「親ということ自体が苦労だ」という前提を含んでおり、両親を尊敬し大切に思っている五十嵐さんには、両親を否定されているように響いてしまったのだ。この話は、「私もこれまで知らないうちに誰かを傷つけるようなことを言っていたのではないかと、自分の言動を顧みるきっかけを与えてくれた。

これまでの十七年間を振り返ってみると、いわゆる社会的マイノリティの方と深く関わる機会はほとんどなかった。唯一記憶に残っているのは、駅で白状を持った男性が電車に乗ろうとしている場面に出会ったときのことで、勇気を出して声をかけたものの、どう手を差し伸べればよいのか分からず、十分に補助ができなかった。「もっと適切な方法があったのではないかと後悔が残り、その後は同じような場面に遭遇しても声をかけることをためらうようになった。この経験を振り返ると、知識や理解を深めることが行動の力となり、それこそが社会的マイノリティの方と共に生きるための第一歩になるのだと感じた。

この本を読み終えて、「知らない」ということの怖さと、「知ろうとする」ことの大切さを学んだ。今まで、「耳が聴こえない人」や「障害のある人」の存在はもちろん知っていた。しかし、そういった人々の現実普段の生活ではなかなか見えず、「大変そうだな」と軽く想像するだけだった。これは表面だけを見た感想で、その人の立場に立って考えたことは一度もなかったと思う。コーダという立場の人がいることも、その人たちが子どもの頃から様々な葛藤を抱えながら過ごしていることも、今回初めて知った。知らないままでは、わかったふりをして相手を傷つけてしまう可能性がある。だからこそ、自分の知らない世界のことを、これからも知ろうとし続けることが大切なのだと思う。

私たちが生きる現代社会において、個性や価値観の多様性が重視されるようになってきている。そして、障害の有無にかかわらず、すべての人が対等であり、その人らしく生きるべきだという考え方が広まっているように思う。しかし私は、対等を目指すあまり特別扱いや過度な優遇が起こり、かえって障害のない人々との間に新たな壁を生んでいるのではないかと考える。これは、私たちが無意識のうちにやっている差別ともいえるだろう。

「当たり前」に決まった形などない、それゆえ、私たちに必要なのは、「違い」を無理に埋めようとするのではなく、まだ多くの人に知られず、受け入れられていない存在について知ろうとすることだ。また、それを知るためには、自分自身の「当たり前」を発信し、他者に「違い」に気づいてもらうことも大切だと思う。さらに、知ることにとどまらず、次の一步として何ができるかを考え、行動に移すことが重要だ。だが、それは個人が努力するだけでは不十分であり、社会全体が変わっていくことも必要だと思う。多様な立場の人々が声を上げやすい環境をつくり、互いの「当たり前」を共有できる場が広がれば、私たちはより深く理解し合えるようになるはずだ。知らないことを恥じるのではなく、知ろうとする姿勢を持ち続けることが社会全体に根づけば、本当の意味での共生社会に近づいていけるのではないだろうか。

（「「コード」のぼくが見る世界」五十嵐大／紀伊國屋書店）